重力波天文学と数値相対論

柴田 大

Max Planck Institute for Gravitational Physics at Potsdam & 京都大学基礎物理学研究所

YUKAWA INSTITUTE FOR THEORETICAL PHYSICS

July 30th 2019

Outline

- I. はじめに: 重力波イベントの現状
- II. 2014年(5年前)と現在
- III. 連星ブラックホールの合体
- IV. 連星中性子星の合体、γ線バースト、元素合成
- V. まとめ

I はじめに: 重力波イベント

O1+O2 data('15—17) O3 data • GW190408

- GW150914 (**'19**—**)** G
- GW151012

GW190412GW190421

重力波観測数は~5/month程度で増加 う重力波天文学の確立へ

- GW170608 More candidates
- GW170729
- GW170809
- GW170814
- GW170817
- GW170818
- GW170823
- more

赤が連星中性子星 その他BH-BH

found by IAS group

- GW190510 ?
- GW190512
- GW190513
- GW190517
- GW190519
- GW190521
- GW190602
- GW190630
- +5 in July

天体観測数は大抵、 飛躍的に増える Kifune Plot



II 2014年と現在

2014年

- Initial LIGOは完成し, Advanced LIGOが構築途上
- ・ 重力波研究は将来有望になっていた。ただし、将来は まだ不透明な状態
- ✓将来を期待し、重力波研究は理論が先行(1990年代の宇宙論と良く似た状況)
- ✓ 数値相対論、解析的研究の両方で、定量的な研究が 活性化
- ✓ 電磁波対応天体の研究も活性化しつつあった
- ・ 今から思えば、うまい具合に準備が進んでいた

数値相対論の紹介

柴田 大 京都大学 基礎物理学研究所



2014/4/18:東大ビッグバンセンター

一般相対論的天体物理学の未解決問題

- ・ 重力波は直接的には未検証 → KAGRAに期待
- 種々のブラックホールの誕生過程は未解明
- ブラックホールの存在は、直接的には未検証:
 ブラックホール近傍の曲がった時空は未検証
- 2つのブラックホールやブラックホールと中性子星からなる連星は未発見:連星中性子星は発見済
- ・ 中性子星の内部状態/状態方程式はよく判っていない
- ・ 中性子星の磁場の強度はなぜ典型的に10¹²ガウス?
- ・ 中性子星磁場の進化の起源は未解明
- ・ ジェットの発生機構は長年の問題
- ・ 継続時間の短いガンマ線バーストの起源は?
- 超新星爆発のメカニズムの解明も道半ば
- ・ 金、銀、プラチナなどの重元素の起源は?
- そもそも一般相対論は常に正しいのか?

2014/4/1₈8:

今日の結論(予定)

未解決問題の解決に、 重力波観測や数値相対論 は大いに寄与するだろう



数年経つと

「重力波を検出して満足するつも りだったが、それだけではなく 元素合成の大問題が解決した」 となるかもしれない。

これが宇宙物理学の醍醐味



一般相対論的天体物理学の未解決問題

- ・ 重力波は直接的には未検証 → KAGRAに期待
- 種々のブラックホールの誕生過程は未解明
- ブラックホールの存在は、直接的には未検証:
 ブラックホール近傍の曲がった時空は未検証
- 2つのブラックホールやブラックホールと中性子星からなる連星は未発見:連星中性子星は発見済
- ・ 中性子星の内部状態/状態方程式はよく判っていない
- ・ 中性子星の磁場の強度はなぜ典型的に10¹²ガウス?
- ・ 中性子星磁場の進化の起源は未解明
- ・ ジェットの発生機構は長年の問題
- ・ 継続時間の短いガンマ線バーストの起源は?
- 超新星爆発のメカニズムの解明も道半ば
- ・ 金、銀、プラチナなどの重元素の起源は?
- そもそも一般相対論は常に正しいのか?

2014/4/18:

一般相対論的天体物理学の未解決問題

- ・ 重力波は直接的には未検証 → <u>Advanced LIGO</u>が解決
- ・ 種々のブラックホールの誕生過程は未解明:<u>ヒント得る</u>
- ・ ブラックホールの存在は、直接的には未検証: <u>解決</u>
 ブラックホール近傍の曲がった時空は未検証
- 2つのブラックホールやブラックホールと中性子星からなる なる連星は未発見:連星中性子星は発見済
- ・ 中性子星の内部状態/状態方程式はよく判っていない
- ・ 中性子星の磁場の強度はなぜ典型的に10¹²ガウス?
- ・ 中性子星磁場の進化の起源は未解明 重力波観測とは
- ジェットの発生機構は長年の問題
- ・継続時間の短いガンマ線バーストの起源は?→少なくとも一部

直接関係しない

は連星中性子星

2019/7/29:

- 超新星爆発のメカニズムの解明も道半ば
- ・ 金、銀、プラチナなどの重元素の起源は?
- そもそも一般相対論は常に正しいのか?

III 連星ブラックホールの合体

- ・ 連星ブラックホールの初めての発見(GW150914)
- ブラックホール近傍の曲がっていて、しかも変化している時空を初めて観測
- ・ すでに20以上観測(今年4月からさらに急増)
- 多様なブラックホール質量: 7—50 太陽質量



GW150914: Gravitational wave signal



Gravitational-wave detectors: Advanced LIGO

10

Simultaneous Detection





LIGO: Livingstone

Distance = 3000km 10 light milliseconds



Noise vs signal PRL 116, 2016, LIGO collaboration



- $\rho_c < 9$: low confidence level
- $\rho_c > 12$: Significant confidence

Numerical relativity simulation for binary black hole merger

Courtesy: Albert Einstein Institute/SXS: Grateful to Roland Haas & Alessandra Buonanno



Gravitational waveform by numerical relativity





その後の展開

- 連星ブラックホールが多数観測される
- ・多くの20太陽質量以上のブラックホール
- ✓われわれの銀河や近傍銀河の中には、確実に
 20太陽質量以上のブラックホールはなかった



・予想に反した理由は?



Predicted dependence of BH mass on metallicity



Metallicity evolution in the universe: Small metallicity → 遠方宇宙か小さい銀河で重いBH



arXiv: 1608.05417, Hunt et al.

質量比とBHのスピンパラメータ(O1, O2)



- ・ 質量比は多様そう
- ・ 回転しているBHの合体もありそう:連星の進化起源か
- 今後、スピンの宇宙赤方偏移依存性がわかれば 連星BHの形成過程の理解に寄与するだろう

IV 連星中性子星の合体

- 今のところ、1+1(+1)例:重力波観測が公表されたのも、
 電磁波観測されたのも、今のところGW170817のみ
- ✓中性子星の半径(tidal deformability)に新たな制限
- ✓重力波以外に多様な電磁波観測
- ✓ 元素合成研究に大きな寄与
- 数値相対論、数値的研究の役割が非常に大きかった

Brief summary of GW170817



Key parameters:

• Chirp mass = $1.188^{+0.004}_{-0.002} M_{sun}$ (90%CL)

Chirp Mass= $m_1^{3/5}m_2^{3/5}(m_1+m_2)^{-1/5}$

- Assuming reasonable spin of NSs, Mass ratio = 0.7 - 1.0 (90% CL) \rightarrow Total mass = $2.73 - 2.78 M_{sum}$
 - → Binary neutron stars
- Viewing angle < ~30°
- Tidal deformability < 800
 → NS radius < 13.5 km

PRL 119, 161101 (2017)



GW observation determines the sky location within 30 square degree !



EM counterparts of GW170817



ApJ 848, 3000 authors 2017

Kilonova & (off-axis) afterglow





Synchrotron emission from relativistic outflow

Margutti et al 2018



Superluminal motion of radio counterpart of GW170817: an evidence for relativistic jet



ただし、時間が十分経過したのちなので、速度はGRBほど (Г~100)速くはないので、GRBの直接的な証拠とは言えない。 RA offset (mas)

Optical-IR EM counterparts of GW170817



merger



Kilonova scenario

(Li-Paczyski 1998, Metzger et al. 2010)



Kilonova/Macronova model

(Li-Paczynski 1998, Metzger et al. 2010)



Peak luminosity & time of kilonova/macronova (Li-Paczyski 1998, Metzger et al. 2010)



Agree broadly with GW170817 for typical mass, velocity and opacity of merger ejecra

Uncertainty of **opacity**: ~ 2 orders of magnitude which is determined by *lanthanide fraction*



Two components model for GW170817





Mass ejection from neutron-star merger

Animation=Soft EOS (SFHo, R~12 km) & 1.30-1.40 M_{sun}



Sekiguchi et al. 2016

Viscous-rad hydrodynamics for post-merger MNS (S. Fujibayashi et al. ApJ 2018)

M~0.05 solar mass, v~0.05 c 合体後にさらに大きな質量放出:これが重要



Electron fraction

Density

数値相対論の貢献:正確な重力波波形の導出





NS Radius measurement from GW170817 event



Future higher SNR events will improve the measurement



"Kilonova" of GW170817/AT2017gfo

Mass ejection from GW170817 (scenario based on numerical relativity) Viscous effect Massive neutron star

+ torus

Ejecta from remnant ~ $0.03M_{sun}$ (mildly neutro Dynamical ejecta ~ $0.01M_{sun}$ Dynamical ejecta) light r elements) a contract of the sun of the sun

Radiation transfer simulation: good agreement



しかしまだ1イベント

Many other phenomenological interpretations are possible. Test by more events is obviously necessary !!

Prediction for next events

	Dynamical ejection	Post-merger ejection
1. Low-mass NS-NS → long-lived MNS	$ \begin{array}{c} M \sim 10^{-3} - 10^{-2.5} M_{sun} \\ Y_e \sim 0.05 - 0.5 \\ \text{Red, luminous} \end{array} $	$ \begin{array}{ c c c c c c c c c c c c c c c c c c c$
2. NS-NS→HMNS (e.g., GW170817)	M ~ $10^{-3} - 10^{-2} M_{sun}$ Y _e ~ 0.05—0.5 Late Red, luminous	
3. NS-NS → BH (assume not very asymmetric)	$ \begin{array}{l} M < \sim 10^{-3} \ M_{sun} \\ Y_e < \sim 0.1 \\ \hline \text{Faint Red} \end{array} $	
4. BH-NS with tidal disruption and/or asymmetric NS-NS	$ \begin{array}{l} M \sim 10^{-3} - 10^{-1.5} M_{sun} \\ Y_e < 0.1 \\ Late Red, \\ Could be luminous \end{array} $	$ \begin{array}{l} M \sim 10^{-3} - 10^{-1.5} M_{sun} \\ Y_e \sim 0.1 - 0.25 \\ Late Red, \\ Could be luminous \end{array} $

V まとめ

- ・ 重力波観測が始まり、成果が出始めた。具体的には、
- 1. 連星ブラックホールを多数発見、合体現象の観測
- 2. ブラックホールの誕生過程に重要な示唆。長期的には その質量分布が明らかに→星の進化の理解が進む。
- 3. 連星中性子星合体も初観測
- 4. 中性子星状態方程式の制限に将来有望な新手法
- 5. 連星中性子星合体では多様な電磁波対応天体
- 6. 少なくともショートガンマ線バーストの一部は連星中性 子星合体起源であることが示唆された(talk by 井岡)。
- 7. 元素合成研究に重要な示唆。今後の観測でさらに精 査されるだろう。
- 8. 数値相対論も重要になった。